



新講堂(1947 昭和22)年落成(右)  
新講堂での創立60周年記念式典1957年11月2日(上)



土浦中学から土浦一高へ2 ～新講堂建設～

終戦以来、本校でも、軍国主義・超国家主義の排除による混乱が続きましたが、1946(昭和21)年4月には講堂建設促進委員会が、5月には工事が、再開されました。今号でも、戦後の土浦中学・土浦一高の状況を「教務日誌」、「進修百年」、屋口正一(中48・高1回)著『櫻水物語 戦中派の中學時代』・『続・桜水物語 終戦直後の中学生生活』・『櫻水物語(三) 土浦一高元年』などから辿ってみます。

引用文中の【 】内は筆者による注記です。

軍国主義的教育内容の排除

1946年4月5日、戦中から戦後に掛けて、校長として難局を切り抜けてきた宗光李太郎の後任として、県視学官であった今宮千勝が赴任しました。

これより先、1945年10月、GHQは戦前の教育体制を解体し、軍国主義・超国家主義の排除と教育の民主化を進める為、「教育に関する四大指令<sup>注1)</sup>」を発しました。この指令に基づく文部省の指示によって、教科書の「墨塗り」を皮切りに、軍国主義的な教科内容の排除が行われ、本県でも、1946年7月以降、本格的に実施されました。本校での動きを当時の教務日誌から拾ってみると、

7月9日 放課後職員会議、軍国主義超国家主義処理二関スル件

7月10日 朝礼アリ、軍国主義物件処理挙手敬礼ノ廃止……等、本日授業ナシ、全校ヲ挙ゲテ軍国主義物件ノ処理ヲナス、正午一先ズ【ひとまず】終了、五年ノミ午後始末ヲナス。

7月12日 午前十時ヨリ【土浦高等】女学校職員来校、処理物件検閲、午後一時ヨリ本校職員、女学校検閲、終ツテ懇談、四時終了

7月13日 軍国主義並ニ極端ナル国家主義的物件処理ニ関スル県ヘノ報告書作成(十五日、地方事務所ニ提出ノ筈)

といった状況でした。この間、10日から16日の間に、5日を要して、奉安殿が破却されました。納められていた御真影と教育勅語とは、県に奉還し、明治天皇の御衣(純白のフロックコート)は、八坂神社に奉遷されました。

また、「佐久良東雄の歌碑<sup>注2)</sup>」を埋め、防空壕の破壊と埋め戻しも行われました。備品などの整理に当たっても、進駐軍に見つけられては大変だ、というような凶書

や「教練」で使用した教具・兵器などの、国家的色彩の濃いものとか皇室に係るものなどは、廃棄処分しました。が、宗光が後年述べているように、現在に至って考えてみると、随分と馬鹿馬鹿しいと思われることもあったようです。こうした時期を振り返って、元本校教諭永山正(地歴科)は、

「……こうして我国は建国以来初めて米英の占領下に入り、水戸に茨城軍政部が置かれ、政治、教育全てに絶対的権威を以て【GHQは】臨みました。土浦にもカラハン大尉ら百二十名が進駐して来ました。さてこれより先、県の指示により、学校図書のうち、軍隊・皇室、日本歴史、地理、修身に関する図書を、中庭に大きな穴を掘り、三日に亘って全部焼きました。燃えない百科事典などの神社・皇室・軍人関係の所は墨で塗り、抹殺しました。軍事教練関係の鉄砲・剣なども埋め、土浦【高等】女学校と相互に査察し合つて、何か残っている所は無いかを調べました。とにかく、秦の始皇帝と同じようなこと【焚書坑儒】をしたわけです。『学校の近くの先生は、家まで検査されるかもしれないので、できるだけ処分しておいた方がよい。』と言われ、私は多くの本をカマスに入れて焼きました。現在ある本の殆どは、戦後揃えたものです。」

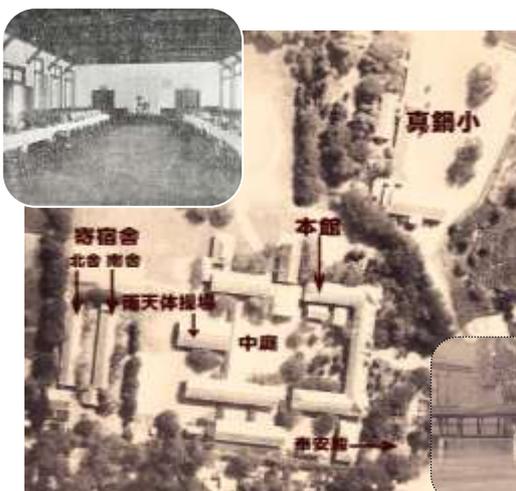
新講堂建設

戦前、入学式や卒業式などの学校行事は、1905(明治38)年に旧本館と同時に竣工した雨天体操場(現在の本館中央付近)にあり、床面積はバスケットボールコート1面が確保できる程度のもので、演壇などは無かつた。で行われていました。

雨天体操場の四方の壁と出入口との上部には黒縁額に入った校訓(1909明治42)年10月30日制定)が掲げられていました。北側の正面右に「至誠」、左に「自重」、

西側に「愛敬」、南に「剛勇」、東に「勤儉」。いずれも、力強い筆太の書で、旧制第一高等学校現東京大学教養学部教授・文学博士の鹽谷温(しおのやおん)先生の筆によるものでした。

1931(昭和6)年頃の本校全景(中)。中庭から見た雨天体操場(下)。雨天体操場での進修同窓会総会(1937年8月21日)(左)。



土浦中学では、1940(昭和15)年度からの1学級増が認められ、44年度の定員は1000名となるため、教室の増設が進められていました。加えて、手狭になってきた雨天体操場に代わる、諸設備を揃えた新講堂の建設が計画されました。1941年1月末の同窓会校内幹事会、2月15日の同窓会幹事会で、講堂建設基金を同窓会が主体となって募ることとなり、講堂200坪、付属施設67坪の新講堂建設に向かつて、寄付金集めが始められました。工事は中澤組の請負で施工されることになり、その敷地は、奉安殿(1928(昭和3)年、昭和天皇即位大札を記念して建設された)のある一面に、と決まりました。募金は順調に進み、1943年7月18日に地鎮祭が行われることになりました。そ

の為、御真影と教育勅語と明治天皇の御衣とを真鍋国民学校の奉安殿に奉遷した上で、奉安殿を東へ、職員室玄関に向かつて右前方の樹木の中へ移すことになりました。腹掛けに地下足袋姿の仕事師が、土台から外された奉安殿をコロに乗せ、ワイヤーを掛けて、手動ウインチの丸太棒を4、5人掛かりでギンギン回して引いて行きました。少しずつ前進させ、所定の位置まで達するのに数日を要しました。

1945年1月25日に、新講堂の上棟式が漸く挙行されましたが、上棟はしたものの、極度の物資不足で内装工事に取り掛かることはできませんでした。

文部省が1944年5月16日に出した、学校工場の実施を命ずる通達（学校工場化実施要綱）により、工場の機械を学校に移し、生徒が作業に従事することになりました。土浦中学では、建設の中断を余儀なくされていた講堂を学校工場に充てることになり、1945年6月26日から、工作兵が講堂脇の小屋及び2年甲組の教室に宿泊して、そのための作業に取り掛かりました。骨組みだけだった新講堂は、屋根を葺き急急の外壁を張って、学校工場となり、広い土間には万力台が幾つも据え付けられ、工具や部品も運び込まれました。7月には、6月18日に第一海軍航空隊に入廠していた2年生の一部が、学校に戻され、学校工場で飛行機部品の製作に従事したようです。

終戦後、新講堂は学校工場ではなくなりましたが、骨組みに屋根と外壁だけという状態が依然として続いていました。

1946年4月18日、講堂建設促進委員会が再開され、5月5日の常陽銀行東支店楼上での会議で、建設委員長に今宮、促進委員長に宗光を選び、目的達成が期されました。5月8日には中澤組より足場資材が搬入され、工事が再開されました。当初の計画では、新講堂に加えて卒業生（同窓生）会館も建設する予定でしたが、戦後の物資不足や極度のインフレの為

に、再開された工事は思うように進まず、会館建設計画は、断念せざるを得ませんでした。当時の苦勞を促進委員長であった宗光は、『進修同窓会報』第5号（昭和41年6月発行）に次のように記しています。

「御真影と教育勅語とは県に奉還し、奉安殿も必要が無くなり、又私の後任、今宮先生の時に講堂再建の問題が起き、その時私は退職して遊んでいましたので、講堂再建の促進委員長として進修同窓会より依頼を受けて、現存の講堂を仕上げるのにお手伝いをした次第です。たゞ物価が高くなりつゞけ、講堂と共に卒業生会館も建設する筈でありましたが、この計画は不可能となり、最初の予算の二倍以上も掛けて、講堂だけを一ケ年余を費して完成した次第でした。土浦市の中澤組其他の方が工事を請負われ、熱心に着実に諸工事が進められ、皆に喜ばれた次第です。後に至つて安く出来たものだと思われる程に、貨幣の価値の変動に驚くばかりでした。以上、記憶を辿りつつ筆を執つてみました。

奉安殿の後始末、講堂建築及び卒業生会館の建設工事、運動場の整備等、一つ一つ手筈をつけて仕上げねばならぬ状態でしたが、物価の変動、貨幣価値の変動、甚だしく、学校の運営を普通の状態に戻してその振興を図ることが如何に困難であつたか、御想像にお任せしたいと思ひます。

物資不足や猛烈なインフレのため、建設は困難を窮めました。宗光はじめ多くの関係者の熱意と努力とによって、工事は進められました。

『いはらき新聞』は、1947年1月24日付の紙面で、工事経過を

「完成の暁は断然果下一を誇る県立土浦中学の大講堂も資材の狂騰と人手難、更に工賃の値上がりから昨秋以来頓挫を来し、学校当局は勿論、工事促進委員も請負人たる中澤組との間に再三折衝中であつたが、きのう午後一時県建設課

係官立会の上、今宮校長、宗光工事推進委員長、卒業生並父兄会代表と中澤組との間に十四万円の工事費を追加増額し、年度末の三月末日までに必ず完成することの再契約をしたので近く父兄会臨時総会を招集して不足工費二十三万円の捻出に協賛することになった。」と報じています。

委員会が協議を重ね、父兄会総会でも生徒1口100円の募金を可決するなどしました。委員は資金の工面に奔走しました。その結果、3月末日までには完成に漕ぎ着け、6月4日に引渡式が行われました。

土浦中学創立50周年及び新講堂落成記念式典は、11月2日に100名を集めて挙行されました。卒業生会館は実現しませんでした。敗戦を乗り越えて、同窓生を含む関係者の悲願が結実した日でした。3日には記念運動会を開催し、5日の午前には日本交響楽団の団員数名によるクラリネットの演奏やソプラノ独唱が行われ、午後1時半からは文学座による『我が町』が上演され、全校を挙げての慶祝となりました。

### 進修記念館・進修学習館建設

新講堂が竣工すると、入学式や卒業式は、雨天体操場に代わつて新講堂で行われるようになりました（雨天体操場は、体育の授業や部活動の活動場所として使われてきていたが、創立60周年記念事業による図書館建設の為、1959（昭和34）年10月に取り壊された）。また、新講堂は、体育の授業では勿論、「文化祭」の会場として、バスケットボール部や体操部などの運動部の練習場や試合会場として、演劇部の稽古場、公演会場として、使用されてきました。

1960年代前半には、生徒数の漸増に伴い、その狭隘さが問題となつてきた上に、戦中戦後の物資不足の中で建設された為、か、老朽化が早く、修理を繰り返して、辛うじて使えている有様でした。そこで、

創立70周年記念事業の一環として、講堂兼体育館の建設が企画され、1968（昭和43）年2月27日に竣工しました。この新体育館（前体育館。現在のテニスコート付近にあり、床面積1,848㎡、鉄骨鉄筋2階建、全長59m、幅36m）の建設により、新講堂は旧講堂或いは旧体（旧体育館）の意と呼ばれるようになり、普段は、部活動や体育の授業で、「高祭」では、デイベートコンテストや喉自慢などの第三会場として、使われていました。特に第三会場の熱狂ぶりは、「魔の第三会場」と呼ばれ、語り草となっています。

1991（平成3）年1月、創立100周年記念事業の一環として、旧講堂（旧体育館）の地に同窓会館兼アリーナ及び多目的学習館の建設が決議されました。記念事業は順調に進み、1996（平成8）年7月に多目的学習館（進修学習館）と命名が、1997年3月に同窓会館兼アリーナ（進修記念館）と命名が、それぞれ竣工し、卒業生会館建設という、同窓生たちの願いが、50年越しに実現しました。

### ① 教育に関する四大指令

① 日本教育制度ニ対スル管理政策  
教育内容、教職員、教科目、教材の検討・改訂についての包括的な指示を出し、文部省にGHQとの連絡機関の設置と報告義務とを課した。

② 教員及教育関係官ノ調査、除外、認可ニ関スル件  
軍国主義的、国家主義思想を持つ者の認可からの排除についての具体的な指示。所謂「教職追放の実施」。

③ 国家神道、神社神道ニ対スル政府ノ保証、支援、保全、監督並ニ弘布ノ廃止ニ関スル件  
信教の自由の確保と極端な国家主義、軍国主義的思想の基盤をなしたとされる国家神道の解体により、国家と宗教とを分離し、政治的目的による宗教の利用を禁じた。

④ 修身、日本歴史及地理停止ニ関スル件  
軍国主義的及び極端な国家主義的思想の排除を教育内容において徹底しようとするもの。修身・日本歴史・地理の授業停止とそれらの教科書、教師用参考書の回収とを命じた。

### ② 佐久良東雄の歌碑

「すめらぎにつかへつれとわれをうみし  
わがたらちねぞ、たふとかりける」